

ゴダールの決別（1993）

HELAS POUR MOI

メディア 映画

ジャンル ドラマ アート

製作国 フランス／スイス

色彩 Color

時間 84分

初公開日 1994/09/03

公開情報 コムストック

【解説】

聖性と言うラディカルなテーマを扱うとき、ゴダール映画もまたごくシンプルに裸の実存を見せてくれる。もちろん夥しい引用と哲学的アフォリズムはなお盛んだが、それが一つのものに還元されていく勢いが全編に満ちていて、無神を信じるのではなく、神について考えないようにしている厭神論者でさえ、この作品の崇高さにはひれ伏して、自分なりの神の像を再び模索し始めるに違いない。スイス・レマン湖のほとりに暮らす平凡な夫婦のもとに、一陣の風のように神は姿を現わす。妻ラシエルはある日不安に襲われ神父に、“自分の相手が夫シモンなのか、神なのか分からない”と告白する。発端は、夫が一晩家を留守にした日。突然帰ってきた夫の様子がまるで別人のようなので、妻が疑惑を口にすると、夫は“僕は君の愛人”で“シモンの身体に移った神”だと宣言し、熱烈に彼女の身体を奪う。それは久しく味わったことのない悦びで、彼女は確かに夫の不在を信じた。果たして、彼はどこに行ったのか？ そして、神とはこのような形で実現してよいものか？ ギリシア神話のゼウス神の人妻との浮気をモチーフに、陽光溢れるリゾート地の風景の中、ゴダールの深遠な問いかけはいつになくストレートに観る者の魂に響く。名優ドパルデューの圧倒的な存在感（近年の肥え方は王者的貫禄を備えさせている）も見もの。“他の遊星から落ちてきた隕石のかけらのように美しい”とのフィガロ紙の評も、まんざら誇張ではない、エンド・クレジットが流れてもなお続く、詩的な映像の連なりはまさに“映画の奇跡”と呼ぶに相応しい。

【クレジット】

監督	ジャン＝リュック・ゴダール	Jean-Luc Godard
製作	アラン・サルド	Alain Sarde
脚本	ジャン＝リュック・ゴダール	Jean-Luc Godard
撮影	カロリーヌ・シャンプティエ	Caroline Champetier
出演	ジェラルド・ドパルデュー	Gerard Depardieu
	ロランス・マスリア	
	ベルナール・ヴェルレー	Bernard Verley
	ジャン＝ルイ・ロカ	
	フランソワ・ガーマン	
	ジャン＝ピエール・ミケル	